

事典をつくった人 下中弥三郎

これから先、何十年かの時が流れ、あなたがお母さん、お父さんになっているとしましょう。なかなか机に向かわない小学三年生か四年生になる娘または息子がいたら、あなたもそう言われたように、「勉強しなさい！」とか「宿題したの？」としからずにはいられなくなる。

すると、あなたの子供は

「なんで勉強せなあかんの？」と、開き直る。

そうきたら、こう言ってあげるとよいでしょう。

「それは、自分の知らないことを発見するためにだよ。」と。

そして、我が子がもう少し大きくなって、今のあなたくらいに成長したら、この物語の主人公、下中弥三郎という人のお話をしてあげてください。

種明かしをしてしまうと、下中弥三郎さんは日本で初めて百科事典をつくった人です。

「事典」という言葉も彼の造語だと伝えられています。当時「辞典」という言葉はありませんが、「事典」という言葉の持つ意味深さは、弥三郎さんの知識に対するこだわりを知るにつれてわかってくるかもしれません。

弥三郎さんは、子供のころは家庭が貧しく、学校にも行けない状況でした。にもかかわらず、自分の知らないことを発見することに無上の喜びを感じながら、勉強を続けました。

これは日本の出版界、いや、社会の歴史に残る百科事典を発刊したその弥三郎さんのお話です。

弥三郎は一八七八（明治十一）年、丹波焼で有名な篠山に窯元の長男として生まれました。下中家では跡取りが生まれたと、皆で大喜びしたそうです。ところが、弥三郎が数えの三歳の時に、父が亡くなってしまふのです。父あつての窯元でしたから、下中家の家計は当然厳しくなりました。極貧の暮らしは、子供の弥三郎に大きな影響を与えます。後年、弥三郎は、からだをくの字に曲げて日暮れまで田んぼで働く母の姿が心に焼き付いていると、言っています。収穫したわずかな米も借金の利子に取られる始末で、育ち盛りの弥三郎は、いつも空腹と闘っていました。近所の家から漂ってくるゆづげのにおいに、胃袋が「オー」と渾のような音をたてるのがよくありました。

学校へ弁当を持っていくことができず、昼食時には家に帰ってきて、リョウブという木の葉にわずかな米を混ぜ、お茶でそれを流し込み、急いで学校へ戻ります。学校まで駆ける弥三郎の腹から、チャップン、チャップンと音がしたといいますが、お昼ご飯はほとんど水分だったのでしょう。

どれほど貧しくても、空腹であっても、弥三郎は学校を休むことはありませんでした。

毎日、先生が教えてくれることを目を輝かせて聞き、新しい知識に出会う喜びを感じていました。

しかし、家の事情はいよいよ弥三郎を学校に通わせられないほどに切迫します。十一歳の時、家計を助けるために学校をやめなければならなくなりました。弥三郎は窯元で手伝いを始めました。

小さい体で重い土を背負って峠を何べんも越えるのです。土の重さによるめいては立ち止まり、歩いては倒れ、倒れては立ち上がり、そうして弥三郎は懸命に働きました。鬼のような形相で、弥三郎は必死に踏ん張りました。

その姿に母は、勉強好きの息子が学校へ通えないことを不びんに思い、「すまんな、こらえてや。」

と涙を流すのでした。母にそう泣かれると弥三郎は、

「かあちゃん、気にせんでええ。僕には、この本がある。」

と、分厚い本を指さしました。

その本は、近所に住む医師の中井先生が、「おまえの学問好きは感心や」と言って、譲ってくれたものでした。百科全書といって当時の西洋の知識が詰め込まれた書物でした。中井先生は、「自ら知りたいと思うことを追い求めるのが本当の学問だ」と弥三郎に諭しました。そして学問することによって「見えんものが、見えるようになってくるんじゃ」とも言いました。

弥三郎は、学校へ行くことができなくなっても、その百科全書を毎日、毎日読み、多くのことを学んでいつかは、新しい知識を身につけることの喜びを感じていたのでした。その様子に母は、「お前は、腹が減ったら、茶わんに字を入れて食べたらいいほど、本好きやな」と言ったそうです。

後年、弥三郎は「激しい労働に服しながらも夜学などして一日たりとも研学の志は捨てなかった」と、このころのことを回顧しています。

篠山には鳳鳴義塾という学校がありました。そこは裕福な家庭の子供しか学ばませんでした。弥三郎の学問好きの評判を聞いた村の指導者である大西寛之助という人が、差し向かいで弥三郎を教育してくれました。弥三郎はそこでも熱心に学びました。

二十一歳になった弥三郎は、神戸へ出て小学校の代用教員の職を得ました。そして独学して小学校の教員免許をとります。勤めた小学校は大きくて、図書館に豊富な書籍があるのが弥三郎には魅力でした。だれもが嫌がる宿直をわざわざ引き受けて、片っ端から図書館の本を読んでいったそうです。自分の知らないことを発見する毎日が続きました。

やがて弥三郎は、帝国図書館があるという東京にここがれをもちます。神戸では、小学校で教え、自らは書物で学び、そして研究し、「小学校における国語及びその教授法」という本を自費で出版しました。後に「出版は教育なり」と、出版社を設立する弥三郎の、それは第一歩でした。

弥三郎があこがれの帝国図書館のある東京に出たのは二十四歳の時でした。夜学の学校に入りましたが、二年の課程を待たず、半年で辞めました。先生の講義を聴くより、自ら進んで図書館で研究する方が性に合っていたようです。東京での弥三郎は、あらゆる分野に興味をもち、本人は「学問上の一浮浪人」だったと当時の自分を表現しています。

一九〇五（明治三十八）年に、日本女子美術学校の教師となった弥三郎は、今まで中心に研究してきた国文学だけでなく、哲学、宗教、社会科学、教育学、文学、美術などに捨て難い面白みを感じます。三十歳になっても、多方面へ知的な関心を向けていきました。

一九一〇（明治四十三）年、中等教員検定試験に合格した弥三郎は、埼玉県師範学校に奉職しました。倫理学などの講義を受け持ちましたが、学生に教えるだけでなく、ここでも学校にある図書館の豊富な蔵書の恩恵を受け、弥三郎は自ら多くのことを学んだのです。

安定した収入も得られるようになり、結婚もして、家も得た弥三郎の生活は落ち着いてきました。しかし、なぜか弥三郎は、この生き方に物足りなさを感じるのでした。

これまで弥三郎は辞典や字典などを読破してきました。これらが独学者の知見を広めるのに、どれほど役立つたかしれないと、弥三郎はある講演で回顧しています。

「しかし、辞書のたぐいは使い慣れると、何か物足りない。」

弥三郎は、いったい何が物足りないかを考えてみました。まず、「意味がわかる」とこと、「知る」ということには、大きな違いがあると感じました。「意味がわかることは『知る』ことのスartetラインに立ったにすぎない。だから自分が求めるような深い内容に 대응することができないのだ」と思いました。さらに、「言葉の意味を相手にするだけではやはり十分ではない」と思うのでした。「言葉というより事柄を、しかも世界のあらゆる事柄を知ることのできるような書物が欲しいものだ」と強く思うようになったのです。

弥三郎は、「僕には、この本がある」と、百科全書をむさぼり読んでいた子供のころを思い出していました。あのような本があれば、たとえば自分のように貧しく、学校へ行けない人たちでも知識を得ることができる。弥三郎はそう考え、日ごろから原稿を書きためていきました。

そして、いよいよ一九一四（大正三）年、「や、此は便利だ」という新語辞典がある出版社から発刊したのです。ところが、その会社は資金繰りがうまくいかず、すぐに倒産してしまいました。弥三郎はこの本を自ら出版しなくてはならなくなりました。

これが、彼が創業した平凡社の始まりです。

「や、此は便利だ」は平凡社が通信販売をしてみると、よく売れました。弥三郎は、世の中の人々が、知識を求めていることを実感し、人々の知りたい、学びたいという意欲に応える、さらに立派な本をつくりたいと考えました。

弥三郎は、理想の本を具体的な形に企画してみました。それは壮大なスケールで、世界のありとあらゆる事象をまとめて説明するというものでした。一九二九（昭和四）年から編集に着手し、これまでに知り合った多くの識者の協力を得て、一九三二（昭和六）年に「大百科事典」の第一巻が発刊されたのです。

「平凡社は名前は平凡だが、やることは非凡だ」と賞賛されました。

「よし。これで、多くの人とわからないことを知る喜びを分かち合うことができる。」

それから三年後、全二十八巻が発刊され、編集は完結しました。

二十八巻が完結した直後、時代の流れや変化の中で、改訂しなければならない項目があることをすでに弥三郎さんは指摘しています。言葉ではなく「事柄」を追い求めれば新しいことに出会うのは当然のことでした。自分の知らないことの発見に、弥三郎さんはどこまでもどん欲でした。「大百科事典」はその後「世界大百科事典」となり、今日も発刊が続いています。今もなお、多くの人の知識の宝庫となっています。

今では調べものはインターネットや電子辞書で事足りてしまう時代ですが、それでも人間から何かを知りたい、という欲求が消え失せることなどありません。もちろん「世界大百科事典」も電子化されて、多くの人に親しまれていますが、一度機会があつたら、あの分厚い一冊を手にしてみてください。

ずしりとくるその本の重みは、生涯を通し自分の知らないことを発見しようとしてきた人、下中弥三郎さんが積み重ねてきた、知への探究心の重みそのものなのです。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。